

盟主的首長墳の動向からみた日向首長連合の消長

宮崎大学教育文化学部
柳沢 一男

1. 南九州古墳出現期の前方後円墳

1980年代中頃まで、列島南北の僻遠の地における古墳の出現は、5世紀を大きくさかのぼらないであろうとする理解が一般的であった。しかし、東北地方では活発な発掘調査の結果、前期初頭にさかのぼる古墳の調査が相次ぎ、もはやこうした通説は打破されたとみてよい。しかし、列島南端の前方後円墳分布域＝鹿児島・宮崎では、良好な発掘調査例がないこともあって、未だ確実に前期初頭ないし前葉にさかのぼる前方後円墳は確認されていない。

一方、前方後円墳の新古＝編年作業は墳形研究のめざましい展開によって新たな段階に突入しつつあり、墳形を軸にしてのアプローチが期待されている。とくに北條芳隆氏以降、岸本直文・澤田秀実氏らの精力的な墳形研究は、発掘調査に制限の多い本地域の場合、とくに参考にすべき方法であろう。幸いここ数年のあいだに、鹿児島・宮崎で相次いで前方後円墳の新測量図が作成・公表され、足がかりができてきている。

かつて筆者は、宮崎平野部を対象に新たな研究法に学びながら多少の整理を行い、この地域の前方後円墳出現が前期初頭にさかのぼる可能性を提案したが、分析に不十分さが目立つ。はじめに最近墳丘測量図が公表された^{つかざき}鹿児島県塚崎古墳群の前方後円墳を検討し、つぎに前稿後に思い当たった幾つかの点についてのべてみたい。

2. 列島最南端の前方後円墳系列

鹿児島県^{きもつぎ}肝属郡^{こうやま}高山町にある塚崎古墳群は、列島最南端の前方後円墳系列である。墳長40～70mの4基の前方後円墳からなる。1997年に公表された測量図を見た印象は、驚きの一語につきる。従来、この系列は5世紀代とされていたが、墳形からすると、そのいずれもが前期とみて間違いないものであったからである。

詳細は略すが、この前方後円墳系列は^{まきむく}纏向型の11号墳に始まり、16号墳（約46m、^{はしはか}箸墓類型・1/6規格）、10号墳（約40m、^{あんどんやま}行燈山類型・1/6規格）、40号墳（約70m、^{ごさし}五社神類型・1/4規格）へと継続した単系列の首長墳系譜とみてよいであろう。しかし、いずれも未調査で墳丘からの採集遺物もないから、はたして墳形のしめす年代がそのまま築造年代をしめすものか分からないが、五社神類型の40号墳を最後に築造が途絶えることに注意しておきたい。

塚崎古墳群から肝属川を挟んで北東3kmに^{とうじん}唐仁古墳群がある。5基の前方後円墳が知られているが、なかでも墳長約140mの1号墳（唐仁大塚）は柄鏡形墳形で、前方部が著しく低平な構造が特徴的である。この古墳の築造時期は評価が分かれるが、宮崎平野部の柄鏡形類型の最終段階に相当し、5世紀初頭～前葉の幅のなかにあると理解している。もしこの想定に誤りなく、古墳が塚崎系譜に後続するとみてよければ、塚崎の4基の前方後円墳の築造年代は墳形のそれぞれがしめす年代（前期初頭～後葉）にほぼ等しいと想定することができる。

3. 日向首長連合の成立と生目古墳群

宮崎平野部の首長墳系譜は北部の小丸川・一ツ瀬川流域と南部の大淀川流域に二つの大きな核がある。

とくに北部の場合、前期から中期初頭にさかのぼる首長系譜だけでも17系譜に達するのは、全国的にみても特異な地域といえるだろう。

前方後円墳墳形で観察した結果、この地域の前方後円墳には、纏向型、箸墓^{にしとのづか}、西殿塚、行燈山、渋谷向山^{しぶやわかいやま}、五社神^{さきみささぎやま}、佐紀陵山^{ほうらいさん}、宝来山^{とび}の各類型、言い換えれば外山茶臼山系統を除くすべての巨大墳の相似形墳が検出されている。

宮崎平野部に大型前方後円墳が登場するのは箸墓類型段階からである。なかでも南部・大淀川下流域につくられた生目^{いきめ}1号墳は、墳丘立面形に違いがあるけれども箸墓の1/2の相似墳とみられる。これに次ぐのは北部の川南^{かわみなみ}11号墳(1/4)、西都原91・100号墳^{さいとばる}(各1/5)だが、いずれも生目1号墳との墳丘格差はきわめて大きい。このように同じ墳形を採用しながら、明確にランクの違いを墳丘規模に表示した階層関係は、この地域の首長間に生目首長を盟主とする首長連合(日向首長連合と呼ぶこともある)が形成されてたことを示唆するものであろう。

この盟主的首長の地位は、生目1号墳ののち多少の時間的懸隔があるが同じく3号墳の被葬者に継承されたい。生目3号墳は墳長143m、吉備以西で最大規模の前期前方後円墳である。後円部頂面にさらに円形壇を重ねた特異な構造を備える。かつてこの墳形を行燈山の相似墳と理解したことがあるが、新測量図を検討した結果、くびれ部と前方部幅に違いがあるものの渋谷向山の1/2程度の相似墳と訂正する。ただし3号墳の前方部の形状は、行燈山から渋谷向山への移行的な様相も看取されるから、まだ検討の余地は残る。

前期前葉から後葉にかけて、墳長100mを越える大型墳は生目古墳群以外にみられず、他の首長系譜との格差は圧倒的であった。しかし、前期後葉に柄鏡形類型の墳形が登場すると、この様相は大きく転換する。

4. 柄鏡形^{えかがみがた}類型の成立と拡散—日向首長連合の変質

後円部径に対して、前方部の長さが墳長の1/2程度と長く、狭長で低平な前方部を接続する独特な墳形を柄鏡形と呼んでいる(ただし、「柄鏡式^{えかがみしき}前方後円墳」と意味は異なる)。

きわめて独特な墳形の出自や出現過程はまだはっきりしていないが、重要な点は、出現から5世紀初頭前後までの約半世紀のあいだの前方後円墳が、北の五ヶ瀬川^{こかせ}下流域から南端の大隅地方^{おおすみ}にいたる広域に分布することである。そして、先述したようにこの墳形最大の前方後円墳は、日向でなく大隅につくられている。

この墳形は時間の経過にしたがって、後円部高に対して前方部高が次第に低下する方向に変化するらしい。前方部高が後円部高の1/2以上のものをa類、ほぼ1/2の一群をb類、それ以下をc類とすれば、a→b→c類の変化が想定される。

a類で最大規模の古墳は西都原13号(80m)、b類1位は持田1号(120m)、2位が生目22号(117m)、c類1位は唐仁大塚(140m)、2位が川南11号(107m)である。柄鏡形墳形段階で注意されるのは、各地の首長系譜の前方後円墳が一様に大型化することである。しかし、墳丘規模だけを取り上げれば、4世紀末葉前後のb類墳形の段階で首長連合を構成する首長間の格差がほとんどなくなったか、あるいは持田系譜に盟主的地位を明け渡すような事態に至ったかもしれない。

いずれにしても、首長連合内での生目系譜の勢力低下は免れなかつたらしい。こののち、盟主的首長墳は日向の地を離れ大隅に築造されることになるが、その背景はさまざまな推理が可能である。たとえば、日向首長連合の混乱に乗じて近接する大隅首長連合(仮称)によって盟主権が篡奪されたとも、あるいは、日向首長連合の首長間では収拾付かない状況から一時的に盟主権を依託したともいえる。いず

れにしても憶測の域を出ない。

柄鏡形類型の創出母胎や創出の背景を説明する成案はないけれども、生目系譜を盟主として、大和東南部大王墳の墳形配布を遵守してきた首長連合の性格が大きく変化したことは確かである。こうした墳形配布体制からの逸脱が首長連合の自律的選択であったのか、それとも他に要因があったのか今後の検討課題だが、大和における大王墳が南東部から北部の佐紀古墳群への移動時期とほぼ重複することは見逃すべきでない。

この時期、佐紀古墳群では墳長280mの五社神古墳ののち、大王墳の墳長が210m程度に縮小し（佐紀陵山古墳）、周辺有力地域の盟主墳との墳丘格差がほとんどみられない状況が現出している。こうした傾向は、河内に移動した最初の巨大墳・津堂城山古墳でも変化をみせることがなかった。墳長280m級という旧来の大王墳規格に復し墳形を一新させた大王墳が、西都原古墳群の女狭穂塚の墳形モデルとなった仲津山古墳であることもきわめて興味深い。

つまり、南九州における柄鏡形類型出現後に生じる大型墳の規模格差の縮小や、盟主的首長墳の移動といった状況は、佐紀陵山から津堂城山古墳段階の大王墳をめぐる諸状況と近似する。そうして何よりも、柄鏡形類型に象徴される首長連合体制を打倒するように登場した女狭穂塚は、墳形も、その登場背景も仲津山古墳と二重写しの印象を受ける。その点で、柄鏡形類型の出現は倭王権の政治的変動と密接に関連し、また、その墳形に象徴される体制解体も同様に王権内・外での変動と連動した可能性がきわめて高いと推測しうる。

5. 女狭穂塚古墳の登場

西都原古墳群に登場した女狭穂塚古墳は、墳長178m、二重の盾形周堀をめぐらし、周囲に方墳の陪冢（171号墳）を伴い、九州最大規模の古墳である。すでに指摘されているように、くびれ部と前方部幅の取り方に多少の差異があるけれども仲津山古墳の3/5の相似墳である。

女狭穂塚の出現とともに、西都原台地上に墓域を共通にしてきた7つの首長墳系譜のうち、6つの系譜で前方後円墳の築造が途絶えるだけでなく、一ツ瀬川流域の前期からの首長系譜のほとんどが断絶している。女狭穂塚の出現は、一ツ瀬川流域の首長墳系譜の大統合によって析出されたことは間違いないが、河内の新たな大王勢力を背景に、上述したように旧来の首長連合を打倒し、新たな首長連合の盟主の座についたと想定する。そうして、女狭穂塚の登場は周辺の首長系譜の動向に大きな影響を与えたことも重要である。

まず、柄鏡形墳形段階で徐々に勢力が低下した生目系譜での大型前方後円墳の築造が途絶えた。また、小丸川流域で柄鏡形類型の大型前方後円墳を現出させた持田・川南古墳群では、断絶することはないが前方後円墳の墳丘規模が60m級に一気に縮小してしまう。日向北部の五ヶ瀬川流域でも前方後円墳の築造は一時的に停止した可能性があるし、南端の唐仁古墳群でも墳丘の小型化が著しい。

これと対照的な変動もある。一ツ瀬川流域では、これまで顕著な大型墳がみられなかった茶臼原台地に見屋根塚（110m）、祇園原台地に大久保塚（約80m）が突如出現する。また生目系譜の衰退した大淀川流域の本庄古墳群では、墳丘の大型化が顕著になる。この段階に新たに出現した大型墳が、女狭穂塚ではじめて採用された円筒埴輪を樹立するのも特徴的である。さらに、見屋根塚と大久保塚の2つの前方後円墳は、女狭穂塚の墳形をアレンジした墳形を共有するなど、従来の首長墳系譜と異なった新たな動きが急速に広まった。

こうした日向北部から大隅までの広域にわたる首長墳系譜の顕著な変動は、女狭穂塚の登場を契機に生じた現象であり、新たな盟主となった西都原勢力による、首長連合の再編（連合参画首長との関係再

編)に伴う一連の動き、と説明するのが妥当であろう。

6. 動揺する首長連合—首長連合の解体—

以上のように広域の覇権を確立した西都原勢力は、女狭穂塚に後続する男狭穂塚(両古墳の築造年代はきわめて接近している可能性が高く、先後関係も未確定だが、現状ではこのように理解している)の段階で王権との関係が変化したらしい。それは男狭穂塚が後円丘直径約130mという破格の規模をもちながら、特異な造出しを接続した墳形(造出し付き円墳ないし帆立貝型古墳としては列島最大規模)を採用したことから想定しうる。また男狭穂塚ののち、その規模を継承する大型墳は—ツ瀬川流域でなく、大隅の志布志湾沿岸に登場する(横瀬大塚/墳長約140m・大仙類型1/4)こともその傍証となろう。しかし横瀬大塚古墳を最後に、墳長140m級の前方後円墳で推移してきた盟主的首長墳が再び築造されることはなかった。

5世紀後葉、横瀬大塚を継承する大型墳は、再び一ツ瀬川流域に戻る(松本塚古墳/土師ミサンザイ類型2/5)が、もはやその規模はようやく100mを確保する程度に縮小している。松本塚古墳を前後して、宮崎平野の有力な首長墳系譜は、南部の宮崎市下北方古墳群、北部の新富町祇園原古墳群の2系譜に固定し、他系譜に対する圧倒的な優位性を堅持しながら、6世紀末前後まで継続する。

男狭穂塚から松本塚にいたる(5世紀前葉~後葉)盟主的首長墳の激しい移動と墳丘小型化は、首長連合に対して数次にわたる衝撃が加えられた結果の対応ではなかったかと推測したい。もちろんその主体は倭王権であり、河内に築造された大王墳がもっとも巨大化した時期にあたる。松本塚古墳は最後の盟主的首長墳といえるかもしれないが、もはやその影は薄く、首長墳としては孤立している。その前後における新たな首長墳系譜の出現が、古墳出現期から形成された日向首長連合の最終的な解体宣言といえるであろう。ちょうど倭王武(獲加多支鹵大王)の時代のことであった。

